

保護者の子どもの現状認識と保・幼・小の連携 — 年長児及び小学1年生の保護者に対する質問紙調査の分析 —

木山 徹哉^{※1} 鹿島 なつめ^{※1} 中山 智哉^{※1} 小林 久美^{※2}
平山 静男^{※1} 白瀬 浩司^{※1} 山田 英俊^{※3} 柳 昌子^{※1}

^{※1}九州女子短期大学初等教育科

^{※2}九州女子大学人間科学部人間発達学科

^{※3}行橋市教育委員会教育部学務課指導室

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2009年10月5日受付、2009年11月13日受理)

要 旨

本稿は、保・幼・小連携の在り方を検討するために実施した意識調査の第3報である。第1報は、小学校教員を対象とした。第2報は、保育者を対象としたものであった。第3報は、年長児及び小学1年生の保護者を対象としたものであり、質問の内容は、子ども一般の育ちの傾向に対するイメージ、入学前・入学後における不安、わが子の育ちの現状認識、各保育・教育内容の担当と程度、の4つから構成した。調査結果から以下の点が明らかになった。

- i) 子ども一般の育ちに対する認識としては、基礎学力や創造力の育ちについては肯定的傾向が示され、自然体験と忍耐力の育ちについては否定の程度が大きかった。
- ii) 入学前・後の不安については、登下校の安全性への不安を示す比率が高かった。また、授業への適応や友だちとの協調の2項目では、肯定、否定の回答が両極化するように分かれた。
- iii) 現状認識等の調査結果から、保育から小学校教育への移行によって、保護者が子どもの育ちを評価する別の「ものさし」をもつことになるため、わが子に対する評価の差が生じてくることが推察される。

はじめに

福岡県行橋市における保・幼・小の連携に関する我々の共同調査研究はすでに3年を経過した。本研究全体の目的と見通しについてはすでに公表した論考を参照していただきたいが、あらためてここで確認しておきたいのは、以下のような本調査研究の趣旨である。「保・幼・小の連携を推進するためには、保育園、幼稚園、小学校、及び家庭並びに地域社会が子どもの状況についての認識の共有化を図る必要がある。そのことによってそれぞれが担うべき課題が明確になるはずである」。^{注-1)}

これまで我々は2度の質問紙調査を実施した。第1回調査は小学校教員を対象として、第2回調査は幼稚園及び保育園の保育者を対象として、それぞれ小1生と年長児に対する彼ら

の現状認識、家庭教育や他教育・保育機関に対する期待や要望、保・幼・小の連携に対する課題意識の在りようを探ったものであった。今回はこれらに続く3回目の調査であり、年長児及び小1生の保護者を対象とした調査である。本稿では、この3回目の調査結果の分析に絞って報告を行う。

本稿は既述のように一連の調査研究報告の第3次報告である。したがって、質問項目、及び分析手法は前2回とほぼ同様としている。ただ今回の調査においては、子どもの現状に対する保護者の認識の背景を探るため、後述するように質問7及び質問8としてこれまでになかった質問内容を加えている。本稿の後半部分においてこれらの質問の回答結果と他の質問の回答結果との関連について、少しばかり踏み込んで検討を行った。

我々の共同調査研究の役割は今回の調査結果報告で終了するわけではない。今回を含めた3回の調査結果から見えてきたものを総合する作業が残っている。その際、これまでの分析において留保していた統計処理も加えて考察を深めたいと考えている。その作業を通して、冒頭に引用した本共同研究の趣旨にあるように、子どもの育ちの現状に対する保護者、保育者、及び小学校教員の認識、子どもの保育や教育への関わり方に関する認識、そして連携の必要性等に関する認識、これらについて調査結果から明らかになった3者の共通性や違いを、行政や市民にフィードバックして一定の共有化を図り、それを基盤として今後の連携に対する施策を検討していかなければならない。

1. 調査の概要

(1) 調査の内容と趣旨

質問紙はフェイスシートを含み全部で11の質問から構成されている。質問の内容は、i) 子ども一般の育ちの傾向に対するイメージ(質問7)、ii) 入学前・入学後における不安(質問8)、iii) わが子の育ちの現状認識(質問10)、iv) 各保育・教育内容の担当と程度(質問11)、の主に4つから構成した。i) では、わが国の子どもの育ちの傾向について、基本的な生活習慣や体験、あるいは学力等に関わる14項目を設定し、子どもの育ちの傾向に対する回答者のイメージを観測した。ii) では、年長児の保護者に対しては入学前の、小1生の保護者に対しては入学後の不安について、学校への適応に関わる10項目を設定した。iii) では、基本的な生活習慣や社会的規範、あるいは教科教育の素地等に関わる31項目を設定して、わが子の育ちの現状に対する回答者の認識を探ろうとした。iv) では、iii) の内容を踏まえて、わが子に身につけさせる保育・教育内容の主たる担当及びその程度について、24項目を設定した。なお、質問9では、質問8の「不安」の解消のための方途について質問事項を設定し、保・幼・小連携の課題に対する保護者の意識を探ろうとしたが、この集計結果等については本稿では割愛した。

(2) 調査の時期、対象、回収の状況

小1生の保護者に対しては、行橋市11小学校区の中から教育委員会によって選定された4校区の保護者に学校を通じて配布・回収を行った。配布数245、回収数152、回収率は62.0%であった。いっぽう幼稚園と保育園の年長児の保護者に対しては、同様に教育委員会が園を選定し、その保護者に園を通じて配布・回収を行った。配布数233、回収数104、回収率44.6%であった。

調査実施時期は、小1生の保護者に対しては2009年3月上旬～中旬、同時に行う予定であった幼稚園及び保育園の年長児の保護者に対しては、2009年6月上旬の実施となった。

(3) フェイスシートの集計結果

フェイスシートの集計結果については、表-1にまとめた。なお、フェイスシート一覧にある「帰宅時」は、「子どもが帰宅する頃に家にいて迎えるか否か」を尋ねたものであり、「催し参加」は、小学校や園の学校行事等の参加程度を尋ねたものである。

表-1 フェイスシート集計結果一覧

項 目	度数	%	項 目	度数	%
回答者数	256	100	回答者年齢		
幼・保	104	40.6	20歳代	19	7.5
小	152	59.4	30～34歳	81	32.1
			35～39歳	94	37.3
			40歳代	57	22.6
			他	1	0.7
			(欠損値)	4	
子どもの性別					
男	125	49.2			
女	129	50.8			
(欠損値)	2				
子どもの人数			帰宅時		
1人	36	14.1	迎える	121	47.3
2人	140	54.7	だいたい	27	10.5
3人	67	26.2	児童クラブ	54	21.1
4人	10	3.9	その他	52	20.3
他	2	0.8	(欠損値)	2	
(欠損値)	1				
回答者数	256	100	催し参加		
父親	12	4.7	必ず参加	160	62.5
母親	240	93.8	だいたい参加	84	32.8
その他	2	0.8	あまりしない	8	3.1
(欠損値)	1		ほとんどしない	2	0.8
			(欠損値)	2	

2. 子ども一般の育ちの傾向に対するイメージ

子どもの育ちに関する保護者の現状認識について今回の調査では、小学校教員や保育者を対象とした過去の質問紙調査における質問内容とは一部異なる項目を設定した。具体的には、質問7で、「わが子」に限定せずわが国の子ども一般の育ちの傾向についてどのような認識（イメージ）を持っているかを尋ねた。質問項目は、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（中央教育審議会答申 2005）における「子どもの育ちの現状」に用いられている項目を採用して、基本的生活習慣や社会規範などに関する14項目

を設定し、各項目それぞれに「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。この質問は、後に続く質問8（入学前、後の不安）、質問10（わが子の育ちの現状認識）と関連を持たせている。質問8との間では、わが国の子ども一般の育ちの傾向に対するイメージとわが子の入学前あるいは入学後における不安に感じる事柄及び程度との相関を見ようとした。また、質問10との間では、同じくわが国の子ども一般の育ちの傾向に対するイメージとわが子の育ちの現状認識との相関を見ようとした。これらの相関等の分析については後に節を設けて述べることとする。

質問7の全14項目のうち、「基本的生活習慣」「規範意識」「自然体験」「主体性」「忍耐力」の5項目で否定的傾向が認められる。なかでも「自然体験」と「忍耐力」の2項目については否定の程度が大きいことが注目される。いっぽう、「基礎学力」「創造力」「想像力」は肯定的傾向が認められる。「他者との関わり」「他者理解」「学習意欲」「表現力」「自尊感情」「生活体験」の6項目については、肯定的、否定的両者の傾向が相分かれる結果となった。以上の傾向は、年長児、小1生それぞれの保護者間で比較検討（t検定）したが、両者間で有意な差は認められなかった。ここでは、表-2に平均値とSDのみを示すにとどめる（表-2）。

表-2 質問7 平均値とSD（保護者全体）

		平均値	SD	n
7-1	基本的生活習慣が身についていない	3.51	0.97	253
7-2	社会のきまりを守るなど規範意識が希薄である	3.63	1.00	254
7-3	子ども同士やおとななど、他者とのかわりが苦手である	3.10	1.05	254
7-4	他者の気持ちを理解しようとしていない	3.13	1.04	255
7-5	学習意欲が低い	3.07	1.07	255
7-6	表現力が乏しい	3.07	1.11	250
7-7	基礎学力が身についていない	2.90	0.95	249
7-8	自尊感情が弱い	2.99	1.00	249
7-9	自然体験が少ない	3.48	1.24	249
7-10	生活体験が乏しい	3.29	1.10	249
7-11	主体性がない	3.29	1.04	248
7-12	創造力が乏しい	2.89	1.14	250
7-13	想像力が乏しい	2.84	1.13	250
7-14	忍耐力が弱い	3.69	1.09	250

質問8の回答結果はどうだろう。この質問は、小1生の保護者と年長児の保護者に同様の質問項目を立て、前者には入学後の不安な事項と程度を、後者には入学前のそれを尋ねたものである。保護者全体で見ると、「登下校の安全」について不安を示す比率が高い。また、「授業についていけるか」と「友だちとうまくやっていけるか」の2項目では、肯定、否定の回答が両極化するように分かれた。さらに、「担任の先生とうまくやっていけるか」では不安度は低かった。もう一つ、「自分のよさを伸ばすことができるか」は強い否定も強い肯定もなく「どちらとも言えない」が最も多い数値となった。残りの項目については、いずれも不安度は

高くない傾向を示した。ここでも、平均値とSDのみを示すにとどめた（表-3）。

表-3 質問8 平均値とSD（保護者全体）

	平均	SD	n
8-1 安全に登下校できているだろうか	3.71	1.13	250
8-2 授業についていけているだろうか	3.04	1.21	250
8-3 担任の先生とうまくやっていけているだろうか	2.62	1.13	250
8-4 友達とうまくやっていけているだろうか	3.09	1.16	249
8-5 給食を残さず食べることができているだろうか	2.53	1.27	253
8-6 排泄は失敗なくできているだろうか	2.01	1.05	252
8-7 服の着脱は自分でできているだろうか	1.54	0.74	253
8-8 自分の持ち物を管理できているだろうか	2.62	1.15	253
8-9 学校のきまりを守ることができているだろうか	2.29	0.97	253
8-10 自分のよさを伸ばすことができているだろうか	2.96	1.04	253

小1生の保護者のみを取りあげると、不安の傾向が強く見られるのは「登下校の安全」だけである。「授業についていけるか」「友達とうまくやっていけるか」の2項目では、肯定的、否定的両者に回答が分かれる結果となっている。また、「担任とうまくやっていけるか」「給食を残さず食べることができるか」「持ち物を管理できるか」「学校のきまりを守ることができるか」の4項目については、不安の傾向は低い数値を示した。この回答結果と年長児の保護者の回答結果を比較（t検定）すると、「登下校の安全」「担任とうまくやっていける」「排泄は失敗なくできる」の3項目のみ有意差（いずれも年長児の保護者のほうが不安の傾向が強い、 $p<.01$ ）があった。

3. わが子の育ちの現状認識

質問10の質問項目は、前回実施した保育者対象の調査内容に対応させて、基本的生活習慣に関するもの7項目、集団や学習の規律に関するもの6項目、人間関係に関するもの5項目とした。以下ではこれらを「生活の素地」に関する項目と称する。また、教科学習に関するものについては前回の7項目から13項目と項目数を増やした。

（1）生活の素地の習得

表-4は、年長児と小1生の保護者に、生活習慣、集団規律、人間関係について自分の子が「どの程度できるようになっていると感じるか」を尋ねた結果である。それぞれの項目に対する両保護者の回答を比較しながら、生活の素地の習得に関する保護者の現状認識をみていく。

i) 生活習慣の習得状況に対する認識

「ほぼできている」と「まあできている」の肯定的回答の合計でみると、年長児と小1生の両保護者とも7項目中3項目、「1.服の着脱」「2.排泄の後始末」「6.朝食して登園」で回答率は9割以上となった。「ほぼできている」だけに注目してその変化を矢印で示すと「1.服の着脱 85.0→85.6%」「2.排泄の後始末 67.0→86.6%」「6.朝食して登園 78.0→88.1%」であった。

表－4 生活の素地の習得状況（生活習慣、集団規律、人間観関係）

生活の素地		年長児の保護者（100名）				小1の保護者（134名）			
		ほぼできている	まあできている	いえない	まだできていない	ほぼできている	まあできている	いえない	まだできていない
生活習慣	1. 自分一人で服の着脱ができる	85.0	15.0	0.0	0.0	85.6	12.9	1.5	0.0
	2. 排泄の後始末ができる	67.0	24.0	6.0	3.0	86.6	11.9	1.5	0.0
	3. 自分の身体の異常について先生に知らせることができる	44.4	37.4	17.2	1.0	53.7	34.3	11.2	0.7
	4. 安全に気をつけて行動することができる	18.0	46.0	33.0	3.0	21.1	57.1	21.1	0.8
	5. 自分の持ち物を管理したり、身近な物を整頓することができる	15.2	48.5	31.3	5.1	14.9	47.8	33.6	3.7
	6. 朝食を食べて登園・登校する	78.0	19.0	3.0	0.0	88.1	10.4	1.5	0.0
	7. 食事を好き嫌い無く食べることができる（食物アレルギーを除く）	28.0	47.0	23.0	2.0	35.1	35.8	25.4	3.7
集団規律	8. 集団で行動することができる	52.0	42.9	5.1	0.0	47.0	44.0	8.2	0.7
	9. 立ち歩きをせず、指示された活動が続けることができる	49.5	39.4	10.1	1.0	48.9	45.1	6.0	0.0
	10. みんなと一緒に食事を終わり「ごちそうさま」ができる	60.6	29.3	10.1	0.0	48.1	40.6	11.3	0.0
	11. 活動開始や中止の時間を守ることができる	46.5	41.4	12.1	0.0	38.1	52.2	9.7	0.0
	12. みんなが使う物を大切にすることができる	36.4	53.5	8.1	2.0	36.6	51.1	10.7	1.5
	13. 先生の話最後まで聞くことができる	43.4	49.5	7.1	0.0	37.6	47.4	13.5	1.5
人間関係	14. 自分からあいさつをしたり、返したりできる	27.3	41.4	28.3	3.0	27.7	48.5	21.5	2.3
	15. 先生や友達との関わりの中で善悪を判断して行動することができる	31.3	55.6	13.1	0.0	23.5	66.7	9.8	0.0
	16. 自分の感情や思いを言葉でうまく伝えることができる	17.2	52.5	24.2	6.1	17.9	53.0	27.6	1.5
	17. 自分の意見や思いを我慢したり、譲ったりすることができる	26.3	56.6	15.2	2.0	18.2	56.1	24.2	1.5
	18. 他の子どもの意見を聞くことができる	24.5	60.2	13.3	2.0	18.2	64.4	15.9	1.5

一方「あまりできているとはいえない」と「まだできていない」の合計でみると「自分の持ち物を管理 36.4 → 37.3%」「好き嫌いなく食べる 25.0 → 29.1%」については未習得と判断する保護者が多く、わずかだが小1生の方が高くなっている。

ii) 集団規律の習得状況に対する認識

「ほぼできている」と「まあできている」の肯定的回答の合計でみると、年長児の保護者では「8. 集団で行動できる 94.9%」と「13. 先生の話最後まで聞く 92.9%」について9割以上、他の4項目も8割台となった。小1生の保護者では「9. 立ち歩きをせず 94.0%」「8. 集団で行動できる 91.0%」「11. 活動開始や中止の時間を守る 90.3%」と9割以上が3項目あり、他も8割台であった。年長児と小1生の保護者を比較して小1生の保護者の回答率が高いのは「9. 立ち歩きをせず」「11. 活動開始や中止の時間を守る」の2項目だけで、他は低くなっている。

さらに「ほぼできている」に注目して両保護者を比較してみると、小1生の保護者の側で「9. 立ち歩きをせず 49.5 → 48.9%」ではわずかに、「13. 先生の話最後まで聞く 43.4 → 37.6%」では5.8ポイント、「11. 活動開始や中止の時間を守る 46.5 → 38.1%」では8.4ポイント、「10. 一緒に食事を終える 60.6 → 48.1%」では12.5ポイントも低くなっている。なお、「できていない」の回答率を見ると「先生の話最後まで聞く」は7.1%から15.0%と2倍に上がっている。

iii) 人間関係の習得状況に対する認識

「ほぼできている」と「まあできている」の肯定的回答の合計でみると、回答率8割以上は

3項目、「15. 善悪を判断して行動 86.9%」「17. 自分の意見を譲る 82.9%」「18. 他の意見を聞く 84.7%」だが、小1生の保護者では「17.」が74.3%で、8.6ポイントも低くなっている。「14. 自分から挨拶 68.7%」「16. 感情や思いを言葉で伝える 69.7%」は年長児では6割台だが、小1生になると7割台に上がっている。

「ほぼできている」だけを見ると人間関係に関する項目の比率は全般的に低い傾向にある。年長児では最高でも「15. 善悪を判断して行動」の31.3%、最低が「16. 感情や思いを言葉で伝える」の17.2%、小1生では最高が「14. 自分から挨拶」27.7%、最低が年長児と同じく「16. 感情や思いを言葉で伝える」の17.9%であった。それと対応して「あまりできているとはいえない」「まだできていない」の否定的回答の比率が高いということである。しかもそれは小1の方が高くなっており、とくに「17. 自分の意見を譲る」では、17.2%から25.7%と8.5ポイントも高くなっている。

以上、生活の素地（生活習慣、集団規律、人間関係）の習得状況について保護者の認識をまとめると次のようになる。まず、生活習慣に関する項目では「年を経ればできるようになる」のが当たり前のように、年長児と小1生の保護者の間では加齢に応じて後者の方に「できている」との回答率が高くなった。しかし、集団規律と人間関係の項目では、必ずしもそうはならず項目によっては逆転する場合もあった。これらは、就学前の保育・教育機関から小学校へという異なる活動組織への移行が、子どもに対する要求基準を、また保護者自身の判断基準を変化させたものと考えられる。移行にともなう「段差」の内実を確定するためには、今回の調査結果を、先行して実施した保育者及び小学校教員を対象とした調査結果と付き合わせて見る必要がある。

（2）教科の素地の習得

表-5は、年長児の保護者と小1生の保護者に、教科の素地について自分の子が「どの程度できるようになっていると感じるか」を尋ねた結果である。

まずは、「ほぼできている」と「まあできている」の肯定的回答の合計を、年長児の保護者と小1生の保護者と比較してみよう。

「19. 簡単な数を数える 97.0%→100%」「20. 自然の変化がわかる 94.9%→97.0%」「24. 絵本・物語を進んで読む 76.0%→78.4%」「27. 生き物を大切にすること 86.0%→89.4%」の4項目の回答率はいずれも2～4ポイントほど小学1年生の保護者のほうがわずかであるが高くなっている。また、「21. 文字や記号がわかる 84.9%→95.5%」（10.6ポイント増）、「25. 時刻や時間がわかる 58.0%→81.0%」（23ポイント増）、「28. 相手に応じて言葉を使い分ける 33.4%→49.3%」（15.9ポイント増）、「30. 経験や想像を順序だてて文章に書く 21.2%→55.3%」（34.1%増）、「31. 絵本・物語の読み聞かせやあらすじを説明する 49.5%→66.2%」（16.7ポイント増）と、これら5項目の回答率は小1生の保護者のほうがそれぞれかなりポイ

表－5 教科の素地の習得状況

教科の素地	年長児の保護者 (100名)					小1の保護者 (134名)				
	習得の程度	ほぼ でき てい る	まあ でき てい るほう	まあ でき てい ないほう	あまり でき てい ない	まだ でき てい ない	ほぼ でき てい る	まあ でき てい るほう	まあ でき てい ないほう	まだ でき てい ない
19. 簡単な数を数えることができる		68.0	29.0	3.0	0.0	88.7	11.3	－	－	
20. 季節により自然の変化があることがわかる		52.5	42.4	5.1	0.0	66.9	30.1	3.0	－	
21. 身近にある文字や記号がわかる		49.5	35.4	15.2	0.0	66.9	28.6	4.5	－	
22. 日常生活に必要な言葉を適切に使うことができる		56.0	42.0	2.0	0.0	55.2	33.6	11.2	－	
23. 経験したり想像したことを、描いたり作ったりすることができる		53.0	39.0	7.0	1.0	52.3	37.9	9.8	－	
24. 絵本や物語などを進んで読むことができる		43.0	33.0	19.0	5.0	48.5	29.9	19.4	2.2	
25. 生活や遊びの中で時刻や時間がわかる		17.0	41.0	34.0	8.0	40.5	40.5	16.0	3.1	
26. 身の回りの自然を利用して、遊びを工夫することができる		46.0	42.0	11.0	1.0	36.8	44.4	18.0	0.8	
27. 生き物への親しみをもち、大切にすることができる		35.0	51.0	13.0	1.0	40.5	48.9	10.7	－	
28. 相手に応じて、丁寧な言葉と普通の言葉を使い分けことができる		7.1	26.3	51.5	15.2	9.1	40.2	43.9	6.8	
29. 身近なことや経験を順序だてて話すことができる		25.0	56.0	14.0	5.0	23.5	45.5	27.3	3.8	
30. 経験したり想像したことを、順序だてて文章に書くことができる		7.1	14.1	43.4	35.4	10.6	44.7	35.6	9.1	
31. 絵本や物語を人に読み聞かせたり、あらすじを説明したりすることができる		14.1	35.4	32.3	18.2	26.2	40.0	28.5	5.4	

ントが高くなっている。その一方で、次の4項目では逆に肯定的回答が低くなっている。
 —— 「22. 日常生活に必要な言葉を適切に使う」(9.2ポイント減)、「23. 経験・想像したことを描いたり作ったりする」(1.8ポイント減)、「26. 自然を利用して遊びを工夫する」(6.8ポイント減)、「29. 身近なことや経験を順序だてて話す」(12ポイント減)。

もう少し詳しく見てみよう。ポイント増の前者9項目のうち、項目19・20・24・27および項目21・25・31は、肯定の程度(「ほぼできている」の比率)がかなり高くなっている。残り2項目は話し言葉・書き言葉に関わる項目であるが、「28. 相手に応じて言葉を使い分ける」「30. 経験や想像を順序だてて文章に書く」は、「まあできているほう」の回答が大幅に増えて「まだできていない」の回答が減るものの、「あまりできているとはいえない」の回答率がそれぞれ43.9%、35.6%と高い。

就学前の園児(5～6歳)と就学後の小1生(6～7歳)という年齢を考慮すれば、項目28については妥当な数値であろう。また、早期教育を行っている園の現場を除けば、書き言葉の習得は基本的に小学校現場でなされるものだから、「30. 順序だてて文章に書く」という項目について、「ほぼできている」3.5ポイント増、「まあできているほう」30.6ポイント増、「あまりできているとはいえない」7.8ポイント減、「まだできていない」26.3ポイント減というも首肯しうところではある。

「23. 経験や想像したことを描いたり作ったりする」については、「ほぼできている」0.7ポイント減、「まあできているほう」1.1ポイント減、「あまりできているとはいえない」2.8ポ

イント増、「まだできていない」1ポイント減と微減である。「26.自然を利用して遊びを工夫する」については、「ほぼできている」9.2ポイント減、「まあできているほう」2.4ポイント増、「あまりできているとはいえない」7ポイント増、「まだできていない」0.2ポイント減となっている。この2項目で回答率が下がっているのは、小1生の保護者が「描いたり作ったり」あるいは「遊びを工夫する」といった文言から、校種の差（あるいは遊び→学びというイメージの差）が意識された結果だと言えるかもしれない。

「22.日常生活に必要な言葉を適切に使う」については、「ほぼできている」0.8%減、「まあできているほう」8.4%減、「あまりできているとはいえない」9.2%増である。「29.身近なことや経験を順序だてて話す」については、「ほぼできている」1.5%減、「まあできているほう」10.5%減、「あまりできているとはいえない」13.3%増、「まだできていない」1.2%減となっている。いずれも、話し言葉の習得に関わる項目であるが、年長児の保護者に比して小1生の保護者のわが子に対する評価・認識がやや厳しくなっていることが看取される。同様のことは、先の「28.相手に応じて言葉を使い分ける」、「30.経験や想像を順序だてて文章に書く」の項目で小1生の保護者で「あまりできているとはいえない」の回答率が高いことについても言えよう。

教科学習の素地の習得に関する保護者の回答結果においても、さきの生活の素地の習得と同様のことが推察される。我々はすでに第2報において保育者と小学校教員との間の、子どもの育ちへの期待や評価等のズレを指摘しているが、保育から小学校教育への移行によって保護者の側も子どもの生活態度や学習到達度などに関わる別の「ものさし」を得ることになるため、わが子に対する評価の差が生じてくると考えられる。

4. 各保育・教育内容の担当と程度

質問11は、24項目からなる「保育・教育内容」のそれぞれについて、「A：幼・保の先生に求める程度」、「B：小学校の先生に求める程度」、「C：自身の家庭が担う程度」について、その意識を尋ねた。「求める（担う）程度」を「①あまり求めない（あまり担わない）」から「②少し求める（少し担う）」、「③ある程度求める（ある程度担う）」、「④大いに求める（大いに担う）」の4段階に分け、回答を求めた。質問11を構成する「保育・教育内容」は、次の4群である。すなわち、基本的な生活習慣に関する項目群（項目No.3,7,18,19,20）、生活や学習の規律に関する項目群（項目No.1,5,6,17,21）、友人関係・遊びに関する項目群（No.2,4,8,9,10,16）、教科の素地に関する項目群（No.11～15）である。

回答結果を年長児の保護者、小1生の保護者に分けて集計し、まとめたものが、次の表-6である。また図1～8は、その集計結果を加工し、小学校および保・幼に「大いに求める」と家庭で「大いに担う」と回答されたものを取り出し、各保育・教育内容を担う先を小学校、保・幼、あるいは家庭のどこに求めているかを明示したものである。

表-6 保護者が保・幼の先生に求めること、家庭で担うこと

項目	保護者	保育者に求める				小学校の教師に求める				家庭で担う			
		あまり求めない	少し求める	ある程度求める	大いに求める	あまり求めない	少し求める	ある程度求める	大いに求める	あまり担わない	少し担う	ある程度担う	大いに担う
1.集団の中でしっかりと学習できるようにすること	小1	10.6	22.7	47.0	19.7	0.0	4.1	36.1	57.6	1.4	19.6	45.5	33.6
	年長	16.3	30.6	32.7	20.4	0.0	7.2	34.0	58.8	2.1	13.7	49.5	34.7
2.良好な友だち関係を形成できるようになること	小1	3.0	12.1	40.9	43.9	1.4	10.2	41.5	46.9	1.4	8.4	44.8	45.5
	年長	3.0	15.2	45.5	36.4	3.1	11.5	47.9	37.5	2.1	15.8	42.1	40.0
3.自分の考えや意見を発言できるようにすること	小1	3.0	18.2	53.8	25.0	0.7	8.9	45.9	44.5	0.7	4.9	41.0	53.5
	年長	0.0	23.5	43.9	32.7	0.0	11.5	38.5	50.0	1.0	4.1	33.0	61.9
4.異年齢の子どもたちとの積極的な関わりを持つ	小1	5.2	17.9	43.9	33.6	4.1	13.0	48.6	34.2	3.5	19.9	49.6	27.0
	年長	3.0	13.1	40.4	43.4	4.2	10.4	39.6	45.8	2.1	21.1	35.8	41.1
5.きまりを守るができるようになること	小1	0.0	9.8	36.6	53.4	0.0	5.6	33.3	61.1	0.7	2.1	16.7	80.6
	年長	0.0	7.1	31.6	61.2	0.0	7.3	26.0	66.7	0.0	1.0	14.3	84.7
6.人の話を最後まで聞く姿勢を身につけること	小1	0.0	15.8	36.8	47.4	0.0	4.8	32.4	62.8	0.0	2.1	15.4	82.5
	年長	0.0	9.2	32.7	58.2	0.0	3.1	28.1	68.8	0.0	1.0	14.4	84.5
7.日々のあいさつの習慣を身につけること	小1	0.0	11.3	31.6	57.1	0.0	9.7	31.0	59.3	0.0	2.8	9.0	88.3
	年長	0.0	10.2	24.5	65.3	0.0	7.4	26.3	66.3	0.0	2.0	7.0	91.0
8.戸外でのびのび遊び、身体を強くすること	小1	0.0	6.8	24.2	68.9	0.7	6.9	44.1	48.3	0.7	4.8	30.6	63.9
	年長	0.0	3.0	12.0	85.0	1.1	4.2	34.7	60.0	0.0	0.0	24.2	75.8
9.自分で工夫しながら物作りに興味を持つこと	小1	1.5	13.5	45.9	39.1	1.4	6.9	53.8	37.9	2.1	11.1	47.2	39.6
	年長	0.0	10.1	39.4	50.5	0.0	7.4	50.0	42.6	0.0	14.7	27.4	57.9
10.身体を使って表現を豊かにすること	小1	2.3	11.4	43.2	43.2	1.4	7.6	56.9	34.0	1.4	15.9	46.3	35.9
	年長	2.0	10.1	36.4	51.5	3.2	10.5	50.5	35.8	3.2	13.7	36.8	46.3
11.絵本等に親しみ想像力を養うこと	小1	0.8	6.8	33.3	59.1	0.7	11.7	54.5	33.1	0.7	6.3	31.3	61.8
	年長	0.0	5.0	27.0	68.0	3.2	7.4	48.4	41.1	0.0	3.1	23.7	73.2
12.ひらがなの読み書きができるようになること	小1	15.2	22.7	39.4	22.7	2.7	4.8	19.9	72.6	1.4	4.9	25.0	68.8
	年長	29.3	24.2	26.3	18.2	4.3	4.3	19.1	72.3	1.0	6.3	30.2	62.5
13.いろいろなことばを覚えること	小1	3.1	23.1	47.7	26.2	0.7	7.6	32.4	59.3	0.7	5.5	25.3	68.5
	年長	9.2	16.3	44.9	29.6	2.1	6.3	27.1	64.6	2.1	3.1	27.1	67.7
14.自然の仕組みに興味・関心をもつこと	小1	0.8	16.3	36.4	46.5	0.0	8.3	38.9	52.8	0.0	5.5	32.4	62.1
	年長	2.0	4.1	37.8	56.1	0.0	7.3	41.7	51.0	0.0	3.1	29.9	67.0
15.数や簡単な算数を数えることができるようになること	小1	10.7	24.4	44.3	20.6	2.1	4.8	23.4	69.7	0.7	4.1	26.9	68.3
	年長	19.4	27.6	33.7	19.4	4.2	5.2	17.7	72.9	0.0	6.2	26.8	67.0
16.危険な場所や安全な遊び方がわかるようになること	小1	0.0	6.4	35.1	56.5	0.0	2.8	22.2	75.0	0.0	0.7	11.7	87.6
	年長	0.0	4.1	22.7	73.2	0.0	2.1	20.0	77.9	0.0	2.0	5.1	92.9
17.床にきちんと座っていられるようになること	小1	2.3	15.2	40.9	41.7	1.4	3.4	29.5	65.8	0.0	6.3	28.7	65.0
	年長	5.1	19.2	35.4	40.4	2.1	7.3	26.0	64.6	0.0	5.2	21.9	72.9
18.着脱の習慣を身につけること	小1	2.3	22.9	45.0	29.8	15.5	19.7	31.7	33.1	1.4	3.4	9.6	85.6
	年長	11.3	21.6	37.1	29.9	34.0	18.1	27.7	20.2	3.0	0.0	11.0	86.0
19.給食を残さず食べ、好き嫌いをなくすこと	小1	3.1	25.2	40.5	31.3	4.2	20.1	36.1	39.6	1.4	6.3	27.8	64.8
	年長	8.2	26.9	46.4	16.5	8.3	26.0	43.8	21.8	2.0	2.0	25.3	70.7
20.トイレの習慣を身につけること	小1	3.8	17.6	42.7	35.9	18.2	21.0	26.7	32.2	3.4	2.7	15.6	78.2
	年長	11.2	24.5	36.7	27.6	19.1	26.6	35.1	19.1	2.0	2.0	15.0	81.0
21.先生の話をしっかりと聞くこと	小1	0.0	12.1	38.6	49.2	0.0	5.4	25.2	69.4	0.0	3.5	31.3	65.3
	年長	1.0	8.1	42.4	48.5	0.0	3.2	27.4	69.5	1.0	8.2	16.5	74.2
22.楽器の演奏や絵画など、芸術的な力を身につけること	小1	11.3	32.3	39.1	17.3	4.8	22.4	43.5	29.3	3.5	27.5	40.8	28.2
	年長	15.5	32.0	33.0	19.6	6.2	22.7	45.4	25.8	4.1	26.8	39.2	29.9
23.水泳や体操など特定の運動技能を身につけること	小1	17.7	26.2	38.5	17.7	4.9	23.9	45.8	25.4	4.9	18.1	48.6	28.5
	年長	25.8	34.0	28.9	11.3	14.6	20.8	43.8	20.8	11.3	25.8	38.1	24.8
24.英語など、外国語に親しむこと	小1	31.3	29.0	27.5	12.2	9.5	22.4	42.9	25.2	10.4	25.0	40.3	24.3
	年長	47.4	25.8	16.5	10.3	13.4	27.8	34.0	24.7	14.3	28.6	30.6	26.5

まず、保護者全体で回答結果を見てみよう。

保護者が小学校、園あるいは家庭の、どこにおいても教育・保育が大いに必要であると感じている項目（保育・教育内容）を抽出したものが図2であり、大きな三角形を示している。抽出した項目には、「5.きまりを守る」「6.人の話を最後まで」「7.あいさつの習慣」のような集団における規律やコミュニケーション等に関わる項目が含まれている。

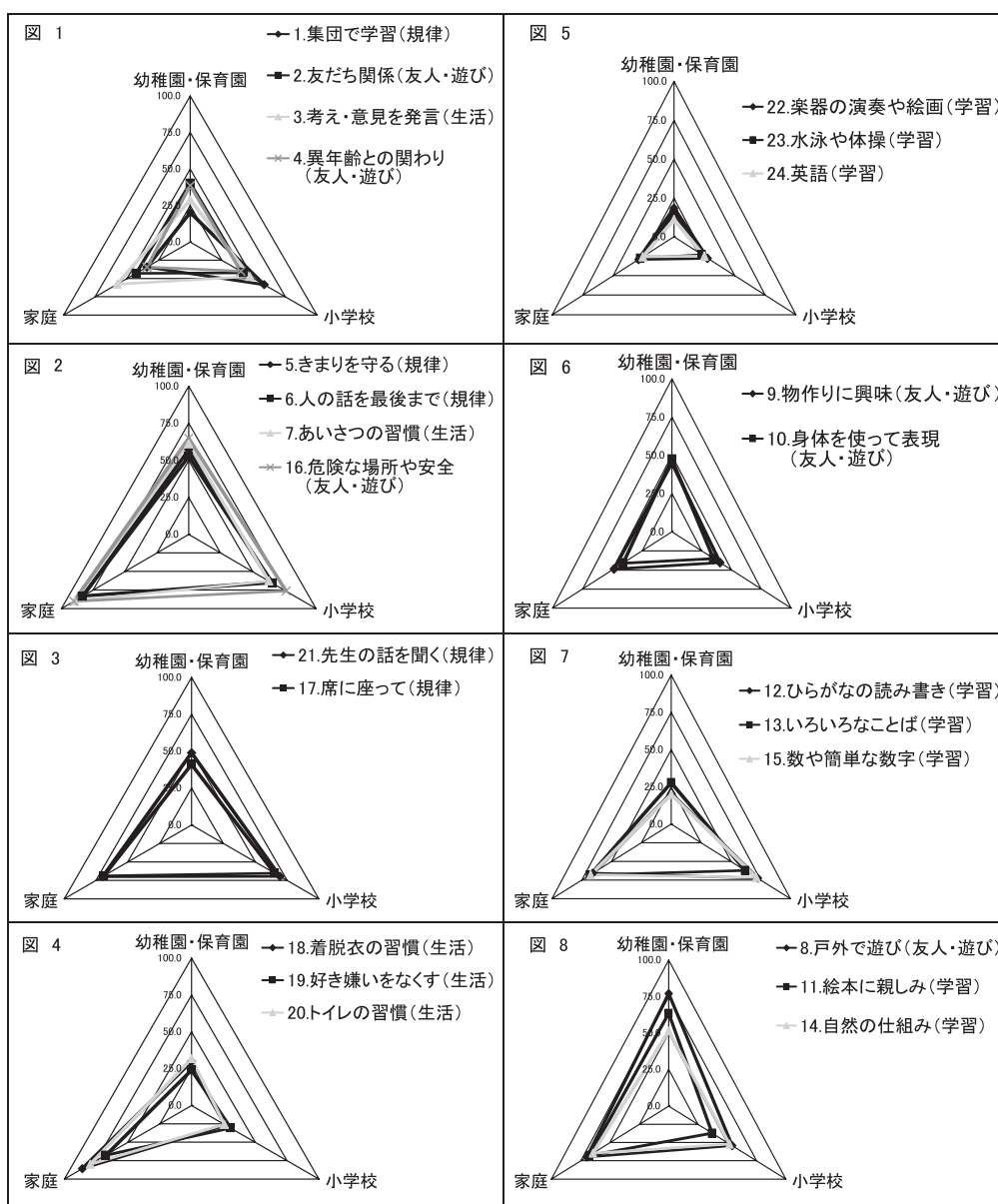


図3と図7は、園よりも家庭や小学校に求める(担う)という回答が多く見られた項目で、図3には「21. 先生の話聞く」「17. 席に座って」のような学習の規律に関するもの、図7には「12 ひらがなの読み書き」「13. いろいろなことば」「15. 数や簡単な数字」のような教科の内容に関する項目がみられた。興味深いのは、教科の素地に関わる項目群において家庭でも担うという回答が高い比率で現れたことである。

図8は、比較的大きな三角形を示した図で、小学校よりも園や家庭に求める(担う)という回答が多く見られた項目で「8. 戸外で遊び」「11. 絵本に親しみ」などがあつた。

図4は、突出して「家庭が担う」が多い項目を抽出した図で、「18.着脱衣の習慣」「19.好き嫌いをなくす」「20.トイレの習慣」のような基本的生活習慣に関わる項目であった。

一方で、小学校、園、家庭のどこにおいても教育・保育の必要性が相対的に多くない項目については、図5であり小さな三角形を示している。「22.楽器の演奏、絵画」「23.水泳、体操」「24.英語」の項目であった。近年、スイミング、ピアノ、英会話は稽古事の上位に位置する内容であることから、別の場所での教育や保育を期待しているということであろう。

年長児の保護者と小1生の保護者とを比較した場合、各保育・教育内容を小、幼・保、あるいは家庭のどこに求めるか（担う）かの回答結果について有意差を検討した結果、保・幼に求める項目では、No.12（年長＜小1）、14,16（年長＞小1）、19,20,23,24（年長＜小1）で、また小学校に求める項目では、No.18,19（年長＜小1）で、さらに家庭で担う項目では、No.8,11（年長＞小1）で有意な差が確認された。

しかし、全体を通して特徴的なことは、多くの項目にわたって保護者が、各保育・教育内容を子どもに習得させるのに保育・教育機関にその役割を期待するとともに、家庭でも担うべきであるという意識が強く示されていることである。このことは基本的生活習慣に関する項目群のみならず、生活や学習の規律に関する項目群や教科の素地に関する項目群における基礎学力の習得に関する項目（例えば、絵本、ひらがな、数など）での比率の高さにも示されている。

5. 子ども一般の育ちに対するイメージと我が子の育ちに対する認識との相関

すでに述べたように、今回の調査では、先行する2回の調査（小学校教員と保育者を対象とした調査）における質問項目および分析方法とほぼ同様に実施したが、質問7および8で、保護者の子ども一般の育ちに対するイメージ、入学前・後の不安についてそれぞれ回答を求め、それらの結果と他の質問の回答結果との関連性をみることを企図した。ここでは「子ども一般の育ちに対するイメージ」（質問7）および「子どもの入学前、入学後に感じる不安」（質問8）と、「子どもの“できる”とを感じる事柄の程度」（質問10）の各項目との関連についてみていくことにする。

i) 質問7および質問8の因子分析結果

まず、質問7の14項目について因子分析（プロマックス回転）を行った。その結果、1因子で累積寄与率が50%を超えたため、1因子構造が妥当であると判断した。質問7については全ての項目の合計得点を「子ども一般の育ちイメージ得点」とし、項目数で割ることににより、得点が1～5の範囲になるように構成した。

次に質問8の10項目について因子分析（プロマックス回転）を行った。その結果、2因子が抽出された（表-7）。第1因子は「担任の先生とうまくやっていけるか」「友だちとうまくやっていけるか」「授業についていけるか」などの内容であったため、「学校における学習や

人間関係への適応」の因子と命名した。また第2因子は、「服の着脱は自分でできるか」「自分の持ち物を管理できるか」「学校のきまりを守れるか」などの内容であったため、「学校における基本的生活規範への適応」の因子と命名した。それぞれの因子は、該当する下位項目の得点を合計し、項目数で割ることで得点が1～5になるように構成した。なお、両因子間には正の相関がみられた($r=.49$)。

表-7 子どもの入学前後に感じる不安の因子分析(プロマックス回転後)

	F1	F2	h2
<第1因子 学校における学習や人間関係の適応> ($\alpha=.80$)			
担任の先生とうまくやっていけるだろうか	.85	-.04	.68
安全に登下校できるだろうか	.75	-.24	.44
友だちと上手くやっていけるだろうか	.73	.13	.65
自分のよさをのばすことができているだろうか	.68	.07	.51
授業についていけるだろうか	.62	.28	.64
<第2因子 学校における集団行動規範への適応> ($\alpha=.66$)			
服の着脱は自分でできているだろうか	-.19	.91	.69
排泄は失敗なくできているだろうか	-.04	.75	.54
自分の持ち物を管理できているだろうか	.03	.70	.51
学校のきまりを守ることができているだろうか	.21	.44	.33
給食を残さず食べることができるだろうか	.08	.40	.20
寄与	3.9	1.2	

ii) 質問7、8の相関分析結果

以上の因子分析の結果を踏まえて、質問7と質問8の関連を調べるために相関分析を行った(表-8)。保護者全体をみると、「学習や人間関係への適応」と「集団行動規範への適応」との間には中程度の相関が認められた。しかし、「子どもの育ちのイメージ」と「学習や人間関係への適応」「集団行動規範への適応」との間には弱い相関しか認められなかった。この結果から、保護者が抱く子ども一般の育ちに対するイメージは、子どもの入学前、入学後に感じる不安にさほど影響を与えないことが理解された。

表-8 子どもの育ちイメージと入学前後の不安2因子の相関及び平均値、SD

	子どもの育ちイ メージ	学習や人間関係 への適応	集団行動規範 への適応	平均値	SD
子どもの育ちイメージ				3.22	.78
学習や人間関係への適応	.23**			3.08	.85
集団行動規範への適応	.23**	.53**		2.19	.68

* $p<.05$ ** $p<.01$

表-9 「子どもの育ちのイメージ」「子どもの入学前後に感じる不安」の平均値、SD、平均値の差

		人数	平均	SD	平均値の差
子どもの育ちのイメージ	小学1年	142	3.27	.80	n.s.
	年長児	100	3.14	.75	
学習や人間関係への適応	小学1年	146	2.94	.85	**
	年長児	103	3.27	.81	
集団行動規範への適応	小学1年	149	2.14	.70	n.s.
	年長児	103	2.27	.64	

*=p<.05 **=p<.01

年長児の保護者および小1生の保護者の「子どもの育ちのイメージ」と「子どもの入学前、入学後に感じる不安」2因子の基本統計量、平均値の差を表-9に示した。「子どもの育ちのイメージ」「集団行動規範への適応」については両者に差はみられなかった。しかし「学習や人間関係への適応」に関しては、年長児の保護者が小1生の保護者に比べ不安を感じていることが理解された。

表-10 幼稚園、保育園の保護者における相関

	子どもの育ちのイメージ	学習や人間関係への適応
子どもの育ちのイメージ		
学習や人間関係への適応	.08	
集団行動規範への適応	.17	.54**

*=p<.05 **=p<.01

表-11 小学校の保護者における相関

	子どもの育ちのイメージ	学習や人間関係への適応
子どもの育ちのイメージ		
学習や人間関係への適応	.36**	
集団行動規範への適応	.28**	.51**

*=p<.05 **=p<.01

この相関関係について年長児の保護者と小1生の保護者との間の相違について観てみると(表-10、11)、年長児の保護者では「子どもの育ちのイメージ」と「学校における集団行動規範への適応」との間に強い相関が認められるものの、「学習や人間関係への適応」との間の相関は認められない。一方、小1生の保護者では、「子どもの育ちのイメージ」と「学習や人間関係への適応」との間、及び「集団行動規範への適応」との間の両者に相関が認められた。

年長児の保護者と小1生の保護者の間には「学習や人間関係への適応」に関する不安という因子において、後者の方が「子どもの育ちのイメージ」との相関がより強く認められる。

表-12 「子どもの育ちのイメージ」「学習や人間関係への適応」「集団行動規範への適応」の平均値、SD

	人数	平均値	SD
子どもの育ちのイメージ	242	3.22	.78
学習や人間関係への適応	249	3.08	.85
集団行動規範への適応	252	2.19	.68

iii) 子ども一般の育ちに対するイメージとわが子の育ちの現状認識との関連

既述の子ども一般の育ちイメージ得点(質問7)とわが子の育ちの現状認識(質問8)31項目について、Pearsonの積率相関係数により検討した。結果、6項目で弱い相関($r=.13 \sim .20, p<.05$)があるのみだった。年長児の保護者と小1生の保護者を分けてそれぞれ検討したところ、年長児の保護者では1項目の弱い相関($r=.21, p<.05$)のみであったが、小1生の保護者では相関の存在する項目はやや増え、「10-3 身体異常について知らせる」($r=.30, p<.001$)、「10-22 日常生活に必要な言葉を適切に使う」($r=.30, p<.001$)、「10-26 身の回りの自然を利用して遊びを工夫」($r=.27, p<.01$)等で相関が見られた。一貫した関連を想定することは困難であるが、小学校1年時の上記のような項目の子どもの様子と、保護者が抱く子ども一般の育ちに対するイメージに関連があることが考えられた。

iv) 入学前・後の不安と育ちの現状認識との関連

「子どもの入学前・入学後に感じる不安」(質問8)の因子分析より抽出された2因子「学校における学習や人間関係への適応」「学校における集団規範への適応」の各因子得点と、子どもの育ちの現状認識31項目の相関をPearsonの積率相関係数により検討した(表-13)。

まず小1生の保護者と年長児の保護者をまとめたデータについて記述する。

質問8から抽出された2因子「学校における学習や人間関係への適応」「学校における学習や集団規範への適応」の因子得点と、質問10「子どもの“できる”と感じる事柄の程度」のほぼ全部の項目について、有意な相関が見られた。ここから、保護者が実際の日常生活から把握している子どもの様子が、入学前・入学後の不安の高低と関連していることがわかる。例外的に相関が見られなかった項目は、「10-1 自分一人で服の着脱ができる」・「10-28 相手に応じて、丁寧な言葉と普通の言葉を使い分けができる」の2項目であった。「服の着脱」は大多数の子どもが年長時まで確立している率が非常に高い項目である。また「丁寧な言葉と普通の言葉の使い分け」は発達の傾向としては小学校中学年の頃に可能となると考えられているために年長・小1時ではできない子どもが多いと考えられる。このために、上記2項目は不安との相関が低かったと推測される。

また小学校入学前と入学後では、保護者の持つ不安と「子どもの“できる”とを感じる事柄の程度」の関連が変化するかを比較した。年長児の保護者と小1生の保護者の相関係数の有意差検定を行ったが、全ての項目で有意差はなかったため、特徴的な傾向を記述するのみとする。

「学校における学習や人間関係への適応」と質問10「子どもの“できる”とを感じる事柄の程度」の関連では、「10-7 食事を好き嫌い無く食べることができる」「10-22 日常生活に必要な言葉を適切に使う」「10-23 経験したり想像したことを、描いたり作ったりすることができる」などの、小学校入学後に給食や授業の始まりと共にクローズアップされる項目に

において、小1生の保護者の持つ不安との間に相関が見られた。これらの項目は年長児の保護者の不安とは相関が有意ではなかった。入学後に学校生活を通して、改めてこうした項目が目に入るようになったために、学校生活への不安との相関が存在し始めたと考えられる。つまり、入学前と後では、保育から学校生活に入る子どもの変化と共に、保護者の注目する視点も変化しているのではないだろうか。また、10-26から10-31の学習に関する項目については、「学校における学習や人間関係への適応」との相関が小1生の保護者では有意ではない。これについては、様々な要因が考えられるが推測の域を出ないため、今後の検討課題とした。

表-13 入学前・後の不安と子どもの育ちの現状認識との関連

質問10 子どもの“できる”と感ずる事柄	質問8 子どもの入学前・入学後に感ずる不安				平均値(SD)	
	「学習や人間関係への適応」		「学習や集団規範への適応」		小1保護者	年長保護者
	小1保護者	年長保護者	小1保護者	年長保護者	(n=142)	(n=102)
1. 自分一人で服の着脱			.54***	.37***	2.85(.40)	2.84(.36)
2. 排泄の後始末			.43***	.42***	2.83(.43)	2.54(.74)
3. 自分の身体の異常について先生に知らせること	.23**	.34**	.39***	.33**	2.41(.71)	2.25(.77)
4. 安全に気をつけて行動すること	.17*	.39***	.27**	.27**	1.99(.68)	1.79(.78)
5. 自分の持ち物を管理し、身近な物を整理すること	.22**	.23*	.38***	.36***	1.75(.77)	1.73(.77)
6. 朝食を食べて登園・登校する	.19*		.20*	.29**	2.83(.48)	2.74(.62)
7. 食事を好き嫌い無く食べること(食物アレルギーを除く)	.24**		.47***		2.02(.88)	2.02(.80)
8. 集団で行動すること	.32***	.31**	.33***	.41***	2.36(.66)	2.48(.59)
9. 立ち歩きをせず、指示された活動が続けること	.24**	.31**	.25**	.38***	2.39(.65)	2.38(.70)
10. みんなと一緒に食事を味わうこと(そうさま)	.24**		.35***	.24*	2.37(.69)	2.51(.67)
11. 活動開始や中止の時間を守ること	.20*	.21*	.27**	.36***	2.28(.64)	2.34(.68)
12. みんなが使う物を大切にすること	.20*	.23*	.36***	.25*	2.25(.69)	2.23(.69)
13. 先生の話を最後まで聞くこと	.28**	.27**	.39***	.42***	2.22(.72)	2.35(.62)
14. 自分からあいさつをしたり、返したりできる		.20*		.23*	2.01(.76)	1.91(.82)
15. 先生や友達との関わりの中で、苦痛を判断して行動すること	.23**	.38***	.31***	.34***	2.14(.56)	2.17(.65)
16. 自分の感情や思いを言葉でうまく伝えること	.27**	.32**	.26**	.37***	1.88(.72)	1.81(.79)
17. 自分の意見や思いを我慢したり、譲ったりすること	.31***	.23*	.29**	.40***	1.91(.69)	2.06(.70)
18. 他の子どもたちの意見を聞くこと	.18*	.26*	.20*	.42***	2.01(.63)	2.07(.68)
19. 簡単な数を数えること	.20*		.37***	.23*	2.89(.31)	2.66(.63)
20. 季節により自然の変化があることがわかる	.24**	.24*	.29***	.28**	2.65(.53)	2.49(.59)
21. 身近にある文字や記号がわかる	.20*	.29**	.34***	.24*	2.61(.58)	2.36(.73)
22. 日常生活に必要な言葉を適切に使うこと	.29***		.34***	.23*	2.42(.69)	2.53(.66)
23. 経験したり想像したことを、描いたり作ったりすること	.32***		.35***	.24*	2.43(.66)	2.46(.67)
24. 絵本や物語などを進んで読むこと	.17*	.22*	.29***	.26**	2.26(.84)	2.14(.90)
25. 生活や遊びの中で時刻や時間がわかる	.23**	.34***	.43***	.28**	2.20(.80)	1.67(.85)
26. 身の回りの自然を利用して、遊びを工夫すること		.30**	.25**	.37***	2.19(.77)	2.32(.71)
27. 生き物への親しみをもち、大切にすること		.29**	.23**	.43***	2.32(.66)	2.19(.70)
28. 相手に応じて、丁寧な言葉と普通の言葉を使い分けること		.20*	.26**		1.52(.75)	1.25(.79)
29. 身近なことや経験したことについて、順序立てて話すこと		.36***	.33***	.34***	1.92(.79)	2.00(.77)
30. 経験したり想像したことを、順序立てて文書に書くこと	.18*	.33**	.34***		1.61(.81)	0.93(.88)
31. 絵本や物語を人に読み聞かせたり、あらすじを説明したりする		.26*	.32***		1.90(.86)	1.43(.95)
					*p<.05 **p<.01 ***p<.001	

「学校における学習や集団規範への適応」と質問10「子どもの“できる”と感ずる事柄の程度」の関連は、入学後も維持されることが見られた。近似の概念をとっているとも考えられるため、妥当な結果と考えられる。特に「10-1 服の着脱」などの基本的生活習慣についての相関は、高く入学後も維持されていた。幼児期に確立すべき課題に心配がある子どもの

保護者は、入学後も高い不安を有していると考えられた。またこうした「学校における学習や集団規範への適応」の不安は、10-19以降の学習に関する「できる」程度とも相関を持っており、幼児期に確立すべき基本的習慣に不安が残る子どもが、就学後の学習でも取り組みが難しい状況が考えられた。

おわりに

調査結果から以下の点が明らかになった。

- i) 子ども一般の育ちに対する認識としては、基礎学力や創造力の育ちについては肯定的傾向が示され、自然体験と忍耐力の育ちについては否定の程度が大きかった。
- ii) 入学前・後の不安については、登下校の安全性への不安を示す比率が高かった。また、授業への適応や友だちとの協調の2項目では、肯定、否定の回答が両極化するように分かれた。
- iii) 現状認識等の調査結果から、保育から小学校教育への移行によって、保護者が子どもの育ちを評価する別の「ものさし」をもつことになるため、わが子に対する評価の差が生じてくることが推察される。

本稿の冒頭ですでに述べたように、我々の共同研究の今後の課題として、過去2回の調査結果を含めて、移行期の子どもの育ちに対する小学校教員、保育者、及び保護者の認識や期待の相違（ズレ）について総合的に検討する作業が残されている。その際、上記iii)に示したいわば子どもを観る観点（あるいは基準）の移行の問題は重要な視点となる。こうした視点をもつ先行研究としては、就学前の子どもと就学後の子どもに対する小学校教員の子ども観の違いに触れた小林小夜子（2003）、また、幼稚園教育に対する保育者と小学校教員との認識の相違に注目した進野智子・小林小夜子（1999）、あるいは、保育者、小学校教員、及び保護者の子どもの能力の捉え方の相違に着目した丹羽さのら（2004）の研究がある^{注-2)}。これらの知見を改めて踏まえながら、3回に亘る調査結果をいっそう精緻なものとして総合する作業を進めたい。

注-1) ・木山徹哉ほか「新入児童の状況と保・幼・小連携の課題ー福岡県行橋市における小学校教員を対象とした質問紙調査の分析を中心にー」九州女子大学研究紀要第44巻2号 2007

・木山徹哉ほか「保育者の年長児に対する現状認識と保・幼・小連携への対応ー質問紙調査の分析を中心にー」九州女子大学研究紀要第45巻1号 2008

注-2) ・小林小夜子（2003）「就学前集団保育から小学校への移行における適応に関する発達心理学的研究ー研究の視点と課題ー」広島大学大学院教育学研究科紀要1部

52号

- ・進野智子・小林小夜子（1999）「幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究」長崎大学教育学部紀要 教育科学 56
- ・丹羽さかの・酒井朗・藤江康彦（2004）「幼稚園、保育所、小学校教諭と保護者の意識調査－よりよい幼保小連携に向けて－」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 2

A Research Concerning the Guardian's Recognition of a Child's Situation and the Issues of Pre-school–Elementary School Cooperation

Tetsuya KIYAMA^{※1} Natsume KASHIMA^{※1} Tomoya NAKAYAMA^{※1}
Kumi KOBAYASHI^{※2} Shizuo HIRAYAMA^{※1} Koji SHIRASE^{※1}
Hidetoshi YAMADA^{※3} Masako YANAGI^{※1}

^{※1} Department of Elementary Education, Kyushu Women's Junior College

^{※2} Department of Education and Psychology,
Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

^{※3} Board of Education in YUKUHASHI CITY

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

This paper is the third report concerning the surveys we have conducted to examine the ideal method of cooperation among the pre-school, kindergarten and elementary schools. The first report was intended for the primary school teacher and the second was intended for the pre-school teacher. The third report is intended for the guardians of five to six year-olds and of first grade elementary school pupils. The contents of the questions consisted of the following four elements:

- 1) An image of the general tendency in bringing up children
- 2) Apprehensions concerning entering the elementary school for the first time and after entering the school
- 3) Perceptions concerning the current conditions of bringing up their child or children
- 4) The level and reputation of the childcare and education contents

The following points became clear from the results of the research:

- i) As recognition of general child rearing, an affirmative tendency is shown when children are nurtured with basic scholastic ability and creativity whereas a negative tendency is fairly large when it comes to nurturing children in a natural state and trying to instill endurance.
- ii) In regards to the apprehensions about entering the elementary school for the first time and thereafter, the ratio was high with concerns about the safety of

the commute to and from school. In addition, the reaction to the two items: adaptation to the class and the cooperation with friends was so divided that it resulted in polarization.

- iii) From the results of this survey about the current situation, one can guess that guardians feel that a different evaluation for their children occurs when their children are evaluated by another standard when moving up from pre-school to the elementary school.